

一章 家族つてなんだろう？

寂しかった子ども時代

私は家庭というものに、昔から決して無関心ではなかったと思っています。なぜなら、私自身が親と暮らせない時期があり、「家族つて何だろう、親つて何だろう」と小さい時から考えるタイプであり、また考えざるを得ない環境に育ってきたからです。いつも寂しい心をなにかで満たしたいという思いがありました。それが、私を聖書および信仰に導いたひとつの原因だったと思います。

私には4歳上の姉がいます。姉は22歳で結婚しました。私が18歳の時です。その頃日本は敗戦後4年くらいで大変な時代でした。日本中が貧しかったのです。姉にとつても少女時代は家庭がまともでなかったわけです。模範となる家庭、夫婦、親子をあまり見ていません。寂しい少女時代でした。

それに加えて、経済的には日本中が大変な時でしたから、姉も緊張していたと思います。住む所がなくて、姉は私たちの家に同居しました。大きくもない家で、壁を中心に半分に分けていました。壁の向こうは姉夫婦ですから、いやでも姉の結婚

生活が見えてきます。義兄は鉄道員で、機関士をしていて、勤めは不規則。そういう中で子どもが生まれ、二人の子どもを育てました。

本当に大変でした。姉は、だれに子育てを習ったわけでもない。手探りで、母性本能だけでやるしかない。子どもが生まれても、どう扱ったらいいか分からない。私も子育ての大変さを、しみじみ知らされました。18〜19歳の私が、

「結婚して子どもを育てるのは、これほど大変なことなのか！」
と思いました。全然落ち着いた気持ちになれないのです。

夜、子どもが寝ません。親の緊張感が子どもにも伝わるのでしょう。姉夫婦は夜中じゅう交替で子どもを背負って寝かし付けようと思いました。壁一つ隔^{へだ}てて、母と私が寝ています。ようやく寝付いたかなと思つてそおつと降ろすと、また泣き始めます。親も子もふらふらです。昼間に子どもが寝ていると、起こさないようにと、私は泥棒みたいに抜き足差し足で歩きました。万一目をさますと、

「キミヨシ、お前がどたばた歩くから、子どもが起きる！」
と姉に叱られます。年頃なのに「結婚なんて、夢も希望もないものだ」と思ったものです。

ある時、姉は「子どもを育てられるだろうか」って思ったそうです。その位、緊

張っていました。耐えられなくなりまして。今で言えば、心療内科へ行かなければいけないような状態になったのではないのでしょうか。でも必死になって育てるしかなかったのです。「生きるか死ぬか」くらいの思いだったのではないのでしょうか。

教会で初めて見た家庭

私はぬくもりというか、温かさ落ち着きというようなものが欲しかったから、教会に行くようになったと、自分で思います。教会へ行きまして、初めて信者さんと接し、牧師の家庭を見ました。

びっくりしました。クリスチャンの人ってこんなに親切なのかと。初めて来た私に「よく来てくれました、また来て下さいね」と温かく声をかけてくれました。それだけでも心を動かされました。と同時に、牧師と関わりその家庭にも行くようになりました。「内藤兄弟、お茶でも飲んでいきなさい」などと言われて家にあがると、娘さんがいたり、いやでも家族と接します。

私は、自分の父親を見たことはありません。周りに叔父叔母はいましたが、心の慰めになるような感じはなかったんです。『家族って、いいもんだなあ、姉の家族とは

「ずいぶん雰囲気が違うなあ」と思いました。私はいつも、自分の家庭の環境を心にとめながら教会に通っておりまして。肉親の父親を呼んだことがありませんから、神さまの名前を呼ぶ時に初めて「お父さん」という呼び掛けをしまして、お祈りをするようになりました。そんな具合で、いろんな風に「家庭」という意識をかき立てられて来たなと思います。

シヨツキングな警告

クリスチャンになり、伝道者としての訓練を受けておりました時、私が決定的にシヨツクを受けたのは、聖書通読をしていた時に出会った、テモテへの手紙第一の3章4～5節のみことばです。「監督は、こういう人でなければなりません」とありますが、「教会の指導者のことだな」くらいのことしか分かりませんでした。「自分も訓練を終えたら、似たような立場に立つのかな」くらいの意識で読みました。

「自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話

をすることができるでしょう」

ドキッとなりました。「ははあ、神さまはここまで監督という人に期待していらっしやるのか」と思った時に、恐れを感じました。「はたして、できるかなあ。もし失敗したら、自分の意志とか熱心では務まらないこともあるんだなあ」と。

聖会などに出てほかの牧師先生に会ったりします。そして、意外に子どもを従わせることが難しいということが分かったのです。「聖会では、筆頭のメッセージをしておられるけれども、子どもさんのことでは苦労しておられるな」と分かるわけです。「親が立派なクリスチャンでも、子どもが自動的に立派なクリスチャンになるわけではない」と感じるようになりました。

あからさまに口には出しません。でも、「あの先生の息子さんは、礼拝にも出ておられない」というような話が、言葉のはしほしに漏れ聞こえてくるわけです。

昔から、先生と呼ばれる人の子どもは難しいというけれども牧師も例外ではないのかな、自分もやがて伝道者になるけれども、この聖書のことばは、『きついなあ重いなあ』という感じがしました。

これは、教会の先生だからこそその特別な警告と思いました。例えば、大学の先生

がここまで言われるだろうか。家で少々の問題はあっても、立派な研究をしていれば、立派な博士で通るのではないだろうか。会社の社長はどうだろう。ここまで言われるだろうか。会社が隆盛であれば、家庭が少々どうかなっていても、社員から突き上げられたりしないのではないだろうか。重役会議で、「社長、あなたの息子はとんでもないですね、もう社長はやめなさい」とは言わないだろうと思つたのです。日本の歴史を見ますと、偉い総理大臣などでも、その人の家庭生活は大変なものです。千円札の顔になるような人が、「ひとりの妻の夫」どころではない、二人も三人も妻があるような生活をしていました。

だから、政治家はいいのです。会社の社長もいい。大学の先生も勤まるのではないのでしょうか。しかし、牧師はここまで問われるのかなと思つた時に、すごい責任を感じたのです。「これは、うかうかしておれんわ」とね。

宣教師から学んだこと

そういう疑問を本当は口に出して聞けばいいのですが、ずーっと心の中に秘めておいたのです。結局、私に家庭の事を教えて下さったのは、日本の牧師ではあ

りませんでした。いや、教えられる先生はいたはずなのですが、事実上日本の牧師からはあまり習わなかった。

これは、私の誤解かもしれませんが、「妻子のことにかまけている男は、ダメだ」という雰囲気を感じていました。

「男ならひたすら仕事をしろ、それが男だ！」

「牧師も、家の事に構わないで、ひたすら福音を宣べ伝えなさい」

という雰囲気です。自分でそのように思い込んでいたのかもしれませんが、ですから、聖書でこういうことを教えられていても、口にできませんでした。勇気がなかったのです。妻子を放っておいて伝道に行くのが男らしい感じがしていました。

私が家庭のことを習うようになったのは、宣教師からです。ある宣教師が言われました。

「うちの子どもは、小学校に入る前にイエス・キリストを信じて、はつきりと救われるように祈っております。上の二人はそうのようにして救われました。あとの二人のために祈っています」

その通り、お子さんたちは5歳か6歳で信仰告白をする。私は、初め「嘘だろう」と思いました。5〜6歳の子の信仰告白をまともに受けていいのだろうかという気

持ちです。信仰告白は、一人前の大人のすることだ、5〜6歳の子どものすることなど、当てにならないのではないかという思い込みもありました。

しかし、「宣教師が嘘をつくはずはない。もし本当だったら、今まで私の考えて来たことは考え直さなきゃいかな」と思いました。SEND宣教師の交わりの中に入って、ことごとに教えてもらうようになりました。その方を家庭講座にお呼びして、町じゅうの教会に声をかけて講演会をしたこともありました。しかし、それはひとえにこの私のためにしていただいた、という気持ちがあるくらいです。そしてこれがとても益となりました。私は、そんな具合に家庭というものに関心を持つようになったわけです。

家庭は教会や学校や会社よりも大切

本章の終わりに、聖書がどんなに家庭を大切にしているかを学びましょう。

神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。

「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」創世記1章27〜28節

ここには、家族、家庭ということばこそ使われてはいませんが、明らかに家族、家庭の意味が教えられています。神さまが最初に創造された。2章では、もっとはつきりしております。

神である主は仰せられた。

「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」創世記2章18節

これは、1章の創造の事実から別の面から光を当てています。

「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから」

それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。創世記2章23〜24節

人と人が結び合わされ作り上げられる集合体には色々なものがあります。町もあります、国家もあります。組合もあります。だけど、神さまが最初に造ったのは家庭です。国家も社会もまだなかった。学校も教会もなかった。だから、教会よりも、学校よりも、家庭が大切なのです。神さまが最初につくられたものですから。

今はどうでしょう。家庭でやらねばいけないことを、学校に頼みます。先生方がオーバーワークです。

「教会のためなら、家庭を犠牲にしてもいい」

果たしてそうでしょうか。私を指導してくれた宣教師の方は違いました。

「牧師であるあなたに、教会の責任を与えられた神さまは、家族の責任をもあなたに与えておられるんだよ。だから、教会のために家庭を犠牲にするのは、神のみここではありません」とはつきりと言われました。聖書は確かにそう教えています。

「人が新妻をめとったときは、その者をいくさに出してはならない。これ

に何の義務をも負わせてはならない。彼は一年の間、自分の家のために自由の身になって、めとつた妻を喜ばせなければならぬ。」 申命記24章5節

これを読んだ時にも、びつくりしました。申命記とはどういう時に書かれたかと言いますと、イスラエル人がカナンの地に入っていく時、モーセが新しい指導者を立て、自分としての最後の教えくらいに精魂せいこんを傾けて伝えていく教えです。ヨシユアは次の指導者としてカナンに入ります。カナンに入れば何が起こるかは分かっています。危ない問題がいつぱい起こる。神の民の社会をこれから作り上げていくという時です。それなのに、結婚したら一年は戦争に行かせちゃダメだよ、夫婦は大事にしてあげなさいよと、モーセは教えます。子孫が繁栄するよという意味があるのかも知れません。

しかし、この世に、このようなことを教え実行する権力者がいるでしょうか。私たちの国も、半世紀前は徴兵制でした。結婚して一週間もしないうちに兵隊に取られたという話をよく聞きました。新聞にこういう短歌が載っていました。

「わが新婚 夢のつかの間 晴天の霹靂へきれきのごと 赤紙あかがみは来し」

相模原の方でした。この方に私は電話をかけて、「短歌を拝見しました。夢のつかの間とありましたが、新婚どのくらいで赤紙が来ましたか、お差し支えなければ教えて下さい」と言うと、「いや、三ヶ月でした」と言われました。

そして、「私は、まだいいほうです。私の弟は新婚一ヶ月で召集されました、そして帰って来ませんでした」と。

この世の権力者はそういうことをします。なぜか。その頃が一番元気がいいからです。兵隊に取りたいわけです。

日本の軍隊の記録を読みますと、途方もない非人間的な団体だということが分かります。人殺しの集団だからと言えばそうですが、人間味はあってもいいと思います。結婚したなどということ、屁とも思わない。人権などこれっぽっちもありません。星一つ違えば、牛か馬のようにこき使います。「自分はまだ帰れて良かった」とその方はおっしゃいました。

イスラエルでは、どんな大変な時でも「新婚の男は戦いに出すな」と教えられました。現代はどうでしょう。新婚の一年は、所得税を免除してやろうなどというイキな計らいは、日本の国にあるでしょうか。ないでしょう。「結婚した」などと言えば、会社はこき使います。早くなんか帰れません。意地悪でわざと遅くまで使われるこ

とさえあります。「昔―軍隊、今―会社」です。

聖書では、本当に家庭を大切にせよと教えている。極端に言えば、家庭は、教会より、学校より、会社より大切だということなのです。

結婚式の祝辞で、私は「会社の方々は、このご夫婦を大事にしてあげて下さい」とお願いします。誰かがそれを言わなくてはなりません。

○ 復習とディスカッションのために

- 1 あなたは、「家族って何だろう」と考え込んだことがありますか？
それはどんな時、どんなことがきっかけでしたか？
- 2 あなたは、心を動かされる家族に会ったことはありますか？
それはどのようなご家族でしたか？
- 3 著者は、「家庭は、国家より、教会より、学校より、会社より大切」と言いますが、あなたはどう思いますか？ その理由は何ですか？